

2026.07.12.

「良い羊飼い」

旧約 詩編第23編1～6節

新約 ヨハネによる福音書10章11～15節

1. はじめに

先週の主の日に与えられた御言葉と今朝与えられている御言葉は、小見出しを見ますと1節～6節が「羊の囲い」のたとえとあり、7～18節がイエスは良い羊飼いとなっています。イエス様の二つのたとえ話が続けて語られているわけですが、これを別々のたとえ話として読むことももちろん出来るわけですが、イエス様を羊飼い、イエス様の救いに与る者を羊としてたとえている一つながりのたとえ話として読むことも出来るでしょう。この一つながりのたとえ話が告げていることははっきりしています。旧約以来のイメージとして、羊飼いは神様であり、羊は神の民を指すものとして用いられてきました。そのイメージを踏襲しつつ、イエス様は羊飼いとして、羊であるイエス様を愛し、信頼し、従う者を守り、導き、確かな救いへと導いてくださると告げておられます。羊飼いにあって自分の羊は、大切な財産であるとともに、生活を共にする欠かせない同伴者です。一頭一頭に心を配り、必要な配慮をし、助けます。家畜となった羊は、羊飼いがいなければ日々の必要な水も食料も自分で手に入れることは出来ません。詩編23編の詩人が歌うように「23:2 主はわたしを青草の原に休ませ／憩いの水のほとりに伴」ってくれます。そして、自分を狙う獣から守ってくれ、間違った方向に行かないようにと導いてくれます。「23:4 あなたの鞭、あなたの杖／それがわたしを力づける。」というのは、そういう意味です。そのように、自分の力だけでは我が身を守ることさえ出来ない神様の羊である私共のために、イエス様は全てを備え、整え、導いてくださっている。旧約以来の羊飼いと羊のイメージを用いて、自分を羊飼いとして語っているわけです。そして、イエス様は御自分を神様として、そしてイエス様を愛し、イエス様に従う者をイエス様の羊、つまり神の民・イエス様の民として語られたわけです。イエス様は実にそのようなお方として来られたと、イエス様御自身が告げられているのが、この例え話の中心です。そのことを押さえて、今朝与えられている御言葉を見ていきましょう。

2. 盗人と良い羊飼い

羊のもとに来る者は、羊飼いととはし限らない。盗人・強盗も来る。これはファリサイ人を指しているということは先週見ました。この盗人は「盗んだり、屠ったり、滅ぼしたりするため」に来ます。しかし、羊飼いであるイエス様は「わたしが来たのは、羊が命を受けるため、しかも豊かに受

けるため」であると告げます。これは、イエス様が私共に「まことの命」、「永遠の命」を与えるために来られたということであり、ファリサイ派の人達のように「自分の信仰的な行いや真面目さによって救われる」「信仰によって良い人になって救われる」と教えている人は、まことの救い、永遠の命を奪っているようなものだ、そのようなあり方では救いに与ることは出来ない。そうイエス様は告げているわけです。私共はどんなに真面目に熱心に神様に従おうとしても、心の底から湧いてくる自らの罪から自由になることはできないからです。ただイエス様を信じるだけで救われる。永遠の命が与えられる。それがイエス様によってもたらされた救いの筋道、福音です。その道を拓くためにイエス様は来られました。

では、イエス様はご自分のことを何と言われているのでしょうか？「10:11 わたしは良い羊飼いである。」と言われます。ただの羊飼いではありません。「良い羊飼い」です。11節と14節で繰り返されています。そして、「良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」と告げられます。この「羊のために命を捨てる」も11節と15節で繰り返されています。イエス様が「良い羊飼い」であるのは、「羊のために命を捨てる」からです。この「羊のために命を捨てる」とは、明らかにイエス様の十字架の死を指し示しています。イエス様は御自身で十字架にお架かりになることによって、私共罪人の一切の罪を贖い、私共を罪赦された者として神様の御前に立たせてくださいます。このことによって、私共は天地を造られた神様に向かって「父よ」と呼ぶことが出来るようになり、神様の子としていただいた訳です。この十字架の故に、イエス様は私共に「まことの命」、「永遠の命」を与えることが出来るようになります。それが出来るのが「良い羊飼い」です。

そして「羊のために命を捨てる」という表現は、羊飼いがどんなに自分の羊を愛しているかということをも示しています。この表現は、現実の羊飼いと羊の関係を超えています。確かに、羊を狼や獣から守るために、羊飼いはその鞭と杖をもって戦うこともあったでしょう。サム上17:34・35を見ますと、羊飼いであったダビデがペリシテの大男の戦士ゴリアトと戦うためにサウル王に自分を紹介してこう語っています。「僕は、父の羊を飼う者です。獅子や熊が出て来て群れの中から羊を奪い取ることがあります。17:35 そのときには、追いかけて打ちかかり、その口から羊を取り戻します。向かって来れば、たてがみをつかみ、打ち殺してしまいます。」そして、実際に羊飼いであったダビデが「石投げ器」でペリシテ人の大男の戦士ゴリアトを倒してしまいました。羊飼にとって羊は大切な財産であり、一緒に生活しているものであり、大切であるに違いありません。けれど、どの羊飼いてもみんな自分の命を捨ててまで羊を守ろうとしたかどうか？それは分かりません。羊が狼に襲われて、羊を守ろうとはするでしょうが我が身が危なくなれば、羊を犠牲にしても我が身を守るのが「普通の羊飼い」なのではないかと思います。しかし、この「良い羊飼い」はそうではないということです。それはこの「良い羊飼い」がイエス様であり、イエス様はご自分が十字架に

お架かりなることによって、つまり自分の命を捨てることによって自分の羊を守る。イエス様を信じ、愛し、従う者に永遠の命を与える。そのためにイエス様は来られたからです。神様の救いの御業の実現のために来られたからです。そのことをイエス様は羊飼いと羊のイメージを用いて「わたしは良い羊飼いである」と宣言されたわけです。

3. 雇い人としての羊飼い

さて、今朝与えられている例え話には 12 節に「雇い人」という言葉が出てきます。これは、今申したところの「普通の羊飼い」のようなものでしょう。この雇い人である羊飼い、つまり羊は自分の羊ではなく、羊は主人のものです。確かに羊を養っているようではありますが、自分の羊ではありませんので、自分の身が危なくなれば羊を見捨てて逃げてしまいます。イエス様は「**自分の羊を持たない雇い人は、狼が来るのを見ると、羊を置き去りにして逃げる。——狼は羊を奪い、また追い散らす。—— 10:13 彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。**」と言われました。自分の羊はないので、狼が来るのを見ると羊を置き去りにしてしまう。見捨ててしまうわけです。これは私共の感覚で言えば、普通のこと、当たり前のことのようにも思えます。しかし、これは「良い羊飼い」との対比で語られています。良い羊飼いは、羊のために自分の命を捨てる。それに比べて「雇い人」は、羊を見捨ててしまう。我が身が大事だからです。この「雇い人」のあり方は、先ほどから私はこれが「普通」ではないかと申し上げてきました。皆さんもそう思われるのではないのでしょうか。これが人間の世界においては当たり前のこと、普通のことです。どんなに羊が大切でも、自分の命と引き換えに守りはしない。それが「**10:13 彼は雇い人で、羊のことを心にかけていないからである。**」と言われていることです。「心にかけていない」つまり、愛していないからだと言うです。もちろん、雇い人だってそれなりに羊を可愛がっていたでしょう。ちゃんと羊の面倒だって見ていたでしょう。しかし、命を捨てるほどには愛していなかった。当たり前のことです。当然のことです。自分の命が一番大事なのですから。しかし、イエス様はそうではなかった。「**羊のために命を捨てる**」のです。これは普通ではありません。全く当たり前のことではありません。どうしてでしょうか？それは、イエス様は「神の御子」だからです。天地を造られた神様の愛を持ったお方だからです。イエス様は自分の命を捨ててまで、十字架にお架かりになってまで、私共を救おうとされた。何という愛でしょう。これが神の愛です。人間の愛ではありません。そして、この愛が私共一人ひとりに注がれています。イエス様は私共を「心にかけておられる」からです。

4. 私を知っているイエス様、イエス様に知られている私

イエス様は良い羊飼いですけれど、それは羊のために命を捨てるだけではありません。イエス様

はご自分と私共が「わたしは自分の羊を知っており、羊もわたしを知っている。」という関係にあると告げておられます。私共はイエス様を知っています。神の御子として、また私共のために十字架にお架かりになられたお方として知っています。しかし、それはイエス様も私共を知っておられるということです。まず、このことに思いを巡らしてみましょう。

私共がイエス様を知っている。それは私共が信仰を持っている、信仰を与えられているということです。これは大切な事です。しかし、このことにだけ私共の思いが向けられていますと、私の信仰的真面目さ、熱心さということにばかり目が行くことになってしまうでしょう。私はこのことについて、神学校時代の一つの思い出があります。それはまさに自分の信仰という所にばかり目が向けられていたとき、頼りなさと言いますか、手応えの無さと言いますか、もっとイエス様との交わりを実感したいという焦燥感に囚われたときがありました。神学校のチャペルで深夜まで独りでイエス様の衣の房でもこの手で触れたいと祈り、願った時もありました。しかし、イエス様はその御姿を現してはくれませんでした。そのような日々を過ごしているときに、ある教会の伝道集会に出席したとき、ガラテヤの信徒への手紙4章8．9節の御言葉「4:8 ところで、あなたがたはかつて、神を知らずに、もともと神でない神々に奴隷として仕えていました。 4:9 しかし、今は神を知っている、いや、むしろ神から知られているのに、なぜ、あの無力で頼りにならない支配する諸霊の下に逆戻りし、もう一度改めて奴隷として仕えようとしているのですか。」が与えられました。特に「今は神を知っている、いや、むしろ神から知られているのに」です。ハッとしました。パウロは自分は神様を知っている、しかしそれ以上に大切な事がある。それは「神様知られている」といことだと告げたのです。私は神様に知られている。このことをはっきり受け止めたとき、イエス様に触れたいとは思わなくなりました。イエス様に触れていただいているからです。ここに私の救いの根拠があることを知らされたからです。

5. 私共とイエス様との関係＝イエス様と父なる神様との関係

更に聖書は15節で「それは、父がわたしを知っておられ、わたしが父を知っているのと同じである。」と告げます。つまり、私共がイエス様を知り、同時にイエス様に知られているという私共とイエス様との関係は、イエス様と父なる神様との関係と同じだということです。イエス様は神様の御子であり、イエス様と神様は永遠の愛の交わりを持っておられます。その愛の交わりを、私共もイエス様との間に持っている、与えられているということです。これは私共の想像を超えた、「絶対的な愛の交わり」「永遠の愛の交わり」を私共とイエス様との間にも与えられているということです。イエス様と神様との関係が決して切り離されることがないように、私共もイエス様から決して切り離されることはないということです。私共はイエス様との交わりを「自分の意識」の中のことの

ように思っているかもしれません。しかし、私共とイエス様との愛の交わりは、その程度ものではありません。私共がイエス様を覚えていないときでも、寝ているときでも、更に私共の地上の命が閉じられた後でも、私共とイエス様との愛の交わりは変わることがないということです。父なる神様がイエス様の全てをご存じあるように、イエス様は私共の全てをご存じです。私共が意気盛んな時も、落ち込んでいる時も、喜びの時も悲しみの時も、健康な時も病気の時も、全てをご存じあり、必要の全てを与えてくださり、共に歩んでくださっています。ここに、私共の救いの確かさがあります。

6. 羊飼いとしての牧師

さて、牧師という言葉はまさに羊飼いということです。この箇所は牧師の就任式などでよく読まれます。確かに「牧師」であるということは、信徒である羊を養う役目を与えられているわけですが、「良い羊飼い」はイエス様だけです。信徒は牧師の羊あるわけではありません。イエス様の羊です。そもそも、牧師もまたイエス様の羊です。では、牧師と信徒の関係はどうなるのでしょうか？牧師はこのたとえ話における「雇い人」ということなのでしょう吗？そうだとすると、「牧師なんて信用できない。いざとなったら、信徒を見捨てて自分のことを第一にする」ということになってしまうでしょう。もちろん、牧師はイエス様ではありません。しかし、イエス様によって「良い羊飼い」の姿を示され、それに倣う者として召されている者です。ヨハネによる福音書21章15節以下で、イエス様は復活された後、その御姿をペトロに現されて三度こう告げました。「**わたしの小羊を飼いなさい**」イエス様が三度告げられた「三」というのは聖書では完全数です。完全なこと、完璧なことを示すときに用いられます。ですから、イエス様が三度も同じことを告げられたということは、単に三回という回数を示しているのではなくて、このご命令が完全にイエス様の御心を示しているのであり、完全に弟子たちに伝えられたということを示しています。このイエス様のご命令、イエス様の御心に従って牧師はイエス様の羊を養うのです。その養いとは、神様の言葉、イエス様の言葉をイエス様の羊である信徒達に与えて養うということです。これは「霊の養い」と呼ばれるものです。しかし、この「霊の養い」は霊だけ、信仰だけを相手にするわけではありません。私共は信仰をもって日々の生活を営んでいるからです。その具体的な信仰の歩みにおいては、様々な助けを必要とします。牧師はそのような助けを自分一人で全て提供することは出来ませんが、教会の交わりの中で、信徒同士の愛の交わりの中で、そして何よりも神様の導きの中でそのような助けが与えられていくようにしていく責任があるのだと思います。

7. イエス様の羊の養い

この「霊の養い」が可能であるのは、二つの理由によります。一つは、イエス様の羊はイエス様を知っている。イエス様の声を聞き分けることができるからです。イエス様を愛し、信頼しているからです。イエス様の愛の交わりの中に居るからです。ですから、もし牧師がイエス様の言葉、神様の言葉以外のことを語ったならば、福音でないことを語ったならば、それを「異なる調べ」として聞き分けることができるからです。もう一つは、牧師はキリストの霊、神様の霊である聖霊の導きの中で御言葉を与えられるからです。牧師は聖書を読んで、調べます。ある意味、それは孤独な作業です。信徒の誰も助けることは出来ません。しかし、実はこの作業は聖霊に導かれて御言葉を与えられ続けた代々の聖徒たちとの対話であり、その意味では少しも孤独な作業ではありません。自分一人が聖書に向かい合っているわけではないからです。代々の聖徒共に聖書に向かい合い、代々の聖徒たちが与えられたように語るべき言葉を与えられていくからです。

今朝も私共は「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」との御言葉を与えられました。イエス様が私共のために命を捨てて、救いの道を拓いてくださいました。そして、私共が御国に至るまで私共一人びとりに必要な全てを備えてくださいます。そのイエス様の愛の中に生かされていることを覚えて、今週も健やかにイエス様の羊、神様の羊として、健やかに歩んでまいりたいと思います。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、主イエス・キリストの父なる全能の神様。

あなた様は今朝も私どもに、私共をどれほど愛してくださっているかを御言葉をもって告げてくださいました。あなた様はその独り子イエス様を私共に与えてくださり、私共の良き羊飼いとしてくださいました。イエス様の十字架の死は、実に私共に代わって、私共のために為されました。私共を一切の罪から贖うためです。まことにありがたく、感謝いたします。あなた様が与えてくださいました私共とイエス様との愛は、永久に変わることはありませんし、誰も壊すことは出来ません。私共がどのような時も、イエス様は私共を守り、支え、導いてくださいます。苦しみの時も、悲しみの時も、あなた様の御支えの中で生かされている私共です。私共がここから始まる一週間も、健やかに、あなた様の羊として歩んでいくことが出来ますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン